



中原中也著

在りし日の歌

創元社

在りし日の歌

昭和十三年四月十日印刷
昭和十三年四月十五日發行



版元

定價 壹圓五拾錢

著者 中 原 中 也

發行者 大阪市西區堀上通一丁目三一
矢 部 良 策

印刷者 東京市牛込區改代町二十四
田 中 末 吉

東京市四谷區靈住町十九
大阪市西區堀上通一丁目

創元社
振替東京一五六五番 電話四谷八三八一番
振替大阪五七〇九九番 電話土佐堀三一八六番

滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の

外地定價壹圓六拾五錢

小 製 角 兩・編 社 想 現

目次

在りし日の歌

含羞	三
むなしさ	五
夜更の雨	七
早春の風	九
月	一二
青い腫	一四
1. 夏の朝	一四
2. 冬の朝	一六

三歳の記憶	一八
六月の雨	二〇
雨の日	二三
春	二四
春の日の歌	二六
夏の夜	二八
幼獣の歌	三〇
この小兒	三三
冬の日の記憶	三五
秋の日	三七
冷たい夜	三九
冬の明け方	四一
老いたる者をして	四三

湖上	四五
冬の夜	四八
秋の消息	五二
骨	五四
秋日狂亂	五七
朝鮮女	六一
夏の夜に覺めて見た夢	六三
春と赤ン坊	六五
雲雀	六七
初夏の夜	六九
北の海	七一
頑はない歌	七三
閑寂	七七

お道化うた	七九
思ひ出	八三
残暑	八九
除夜の鐘	九一
雪の賦	九三
わが半生	九五
獨身者	九七
春宵感懷	九九
曇天	一〇三
蜻蛉に寄す	一〇四

永訣の秋

ゆきてかへらぬ	一〇九
一つのメルヘン	一一二
幻影	一一四
あばずれ女の亭主が歌つた	一二六
言葉なき歌	一二九
月夜の濱邊	一三一
また來ん春	一三三
月の光 その一	一三五
月の光 その二	一三七
村の時計	一二九
或る男の肖像	一三一
冬の長門峽	一三四
米子	一三六

正午		一三九
春日狂想		一四一
蛙聲		一四九

後記

(口繪肖像著者十九歲)

裝幀 青山二郎

在
り
し
日
の
歌

含^{はじ}

羞^{ちひ}

——在りし日の歌——

なにゆゑに　こゝろかくは羞ぢらふ

秋　風白き日の山かげなりき

椎の枯葉の落窪に

幹々は　いやにおとなびイぢゐたり

枝々の　拱^くみあはすあたりかなしげの

空は死兒等の亡靈にみち　まばたきぬ

をりしもかなた野のうへは

あすとかんのあはひ縫ふ 古代の象の夢なりき

椎の枯葉の落窪に

幹々は いやにおとなびうちゐたり

その日 その幹の隙ひま 睦みし瞳

姉らしき色 きみはありにし

その日 その幹の隙ひま 睦みし瞳

姉らしき色 きみはありにし

あゝ！ 過ぎし日の 仄燃えあざやぐをりをりは

わが心 なにゆゑに なにゆゑにかくは羞ぢらふ……

むなしさ

臘祭の夜の 巷に墮ちて

心臓はも 條網に絡み

脂あぶらぎる 胸乳むねちちも露あじは

よすがなき われは戯女たはれめ

せつなきに 泣きも得せずて

この日頃 闇を孕めり

遐き空 線條に鳴る

海峡岸 冬の曉風

白薔薇の 造化の花弁

凍^いてつきて 心もあらず

明けき日の 乙女の集^づひ

それらみな ふるのわが友

偏菱形Ⅱ聚接面そも

胡弓の音 つづきてきこゆ

夜更の雨

——エルレーヌの面影——

雨は 今宵も 昔 ながらに、

昔 ながらの 唄を うたつてゐる。

だらだら だらだら しつこい 程だ。

と、見る エル氏の あの圖體づうたいが、

倉庫の 間の 路次を ゆくのだ。

倉庫の 間にや 護謄かたづ合羽はの 反射ひかりだ。

それから 泥炭の しみたれた 巫戯おどろけだ。

さてこの 路次を 抜けさへ したらば、

抜けさへ したらと ほのかな のぞみだ……

いやはや のぞみにや 相違も あるまい？

自動車 なんぞに 用事は ないぞ、

あかるい 外燈^ひなどは なほの ことだ。

酒場の 軒燈^{あかり}の 腐つた 眼玉よ、

遐^{とほ}くの方では 含密^{せうみつ}も 鳴つてゐる。